

2018年度横浜ナザレン教会降誕節第五主日礼拝
「主イエスの学校」詩編1

【聖書箇所】

詩編 1

- 1 いかに幸いなことが
神に逆らう者の計らいに従って歩まず
罪ある者の道にとどまらず、
傲慢な者と共に座らず
- 2 主の教えを愛し、
昼も夜も口ずさむ人。
- 3 その人は流れのほとりに植えられた木。
ときが巡り来れば実を結び
葉もしおれることがない。
その人のすることはすべて、繁栄をもたらす。
- 4 神に逆らう者はそうではない。
彼は風に吹き飛ばされるもみ殻。
- 5 神に逆らう者は裁きに堪えず
罪ある者は神に従う人の集いに堪えない。
- 6 神に従う人の道を主は知っていてくださる。
神に逆らう者の道は滅びに至る。

1 主イエスの学校

私たちの礼拝では、ルカ福音書から御言葉を聴いてきていますが、毎月最終週の伝道礼拝では、予め決めたテーマに沿う聖書箇所を挙げています。今日の伝道礼拝のテーマは、「主イエスの学校」です。「信仰生活とはイエス様の学校で学んでいるようだ」。それが信仰者としての歳月を振り返った時の私の実感でした。一つの問題を主イエスの導きのもとに乗り越えた時、喜ばしい新しい発見があります。でもそれで終わりではありません。人生には思いもかけぬ問題が発生します。それもまた、祈りと聖書の御言葉を通じて乗り越え、新しい生き方、知恵を覚えてもらう。そうして、主イエス・キリストのことをより深く知る…そのような経験が続いて、「信仰者として生きるとは、イエス・キリストの学校で学ぶことのようなものだ」という想いに至ったわけです。もうこれ以上、イエス様から学ぶ必要はない、私は完全な義人であり、聖なる人間である…なんてことは、イエス・キリストを信じる信仰にはないのです。パウロもフィリピ信徒への手紙でこう言っています。「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めて

いるのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。」(フィリピ 3:12～14)。

では、私たちが主イエスの学校で、イエス様に教えを受けることの目標はなんなのでしょうか。そんなことを考えている時に、偶然、詩編1篇に目がとまりました。1節です。「いかに幸いなことか」。「ああ、主イエスの学校で信仰を学び続ける目的は、“いかに幸いかな、我が人生”と言えるためだ」と気づかされたのです。今日は、この詩編1から、主イエスの学校で幸いな人生をどのように学ぶのか見ていこうと思います。

2 幸い

何を幸せな人生とするかは、人それぞれでしょう。ある企業が、「あなたは何を最も幸せだと考えますか」というアンケートを取ったそうです。富か名誉か、愛情豊かな人間関係か、趣味を満喫することか…最も多かったのは、「健康」でした。日本人の考える幸福は、健康であること…だということです。確かに私たちの健康へのなみなみならぬ熱意は、健康食品や健康器具のCMを見ない日はないという事からも明らかです。「健康になるためだったら、死んでもいい」と言った人もいるとかいないとか。確かに健康は大切です。ですが、本当に健康に生きていればそれで幸せなのでしょうか。

「健康」を求めているも、そうはいかないのが私たちの一生ではないでしょうか。不意の病に襲われることもあります。「健康」という土台に立て上げた幸せは、非常に脆いものなのです。富や名誉などもそうでしょう。いつなくなるかは分かりません。愛情深い人間関係もそうです。人の心とは移ろいやすいものだから。では、詩編1篇は何をもって、「幸いなるかな」と言っているのでしょうか。1節から2節。非常に単純明快です。「悪人の仲間にならず、神の教えを愛し、いつも口ずさむ者」が人間として最上級の、この上ない幸せな人生だということです。

3 神からご覧になった人間

しかし、この詩編1、悪人と善人の対比が極端ではないでしょうか？神を信じる人は善人であり、信じない人は悪人。本当にそうでしょうか。神を信じない人にも善人はいるだろうし、神を信じている人でも悪を行ってしまう事はあるだろう…と思います。

いえそれどころか、神からご覧になれば、私たち人間の大半はこの「悪人」の範疇に入るのではないのでしょうか。人間はみな、神に造られた被造物にす

ぎません。いつかは塵に還る儚い存在です。しかし、そのような存在にも拘らず、人にはみな、自分たちが神になりたいという思いがあります。だから、私たちは、自分たちの都合や欲望を叶える為に、神が造られたこの美しい世界を破壊しています。最近では海に流れ出るプラスチックの事が話題になっていますが、環境破壊の問題は深刻であり異常気象を引き起こし、おおきな災害が頻発しています。また、私たちは、弱い人や小さい人を思いやるよりも、自分たちの些細な欲望を満たすことを優先してしまいます。私たちの自己中心という罪が作り出す社会は、弱肉強食、まるで野獣の群れのような一面をもっています。「極めて良い」とご自身がお造りになった世界を喜ばれた神様にとって、このような世界の現実を招いた人間をどのようにご覧になっているのでしょうか。神は完全なる正義の方だと聖書は語ります。間違ふことのできないお方なのです。ですから、創造主なる神を忘れ、自分勝手に生きている私たち人間は、神から見れば忌まわしい、滅びるしかない存在でありましょう。

4 イエス・キリストの福音～十字架と復活、聖霊降臨

そんな私たちの為に、神の御子イエス・キリストは、完全に人となってこの世に来てくださいました。そして、私たちの自己中心的な罪を贖い、私たちの滅びを一身に身に受けて十字架にかかってくださいましたのです。父なる神は、ご自身の独り子を私たちの身代わりに十字架に滅ぼし、私たちを滅ぼすことをやめたのです。その証として、神は、十字架刑で苦しみぬいて完全に死んで葬られた主イエスを甦らせました。私たちの背きの罪が赦されたことを私たちに教えるためでした。そうして、主イエスは復活して父なる神様のもとに帰って行かれました。私たちの滅びは、主イエスの復活の命に呑み込まれました。

5 聖霊によって

しかし、それだけではありません。主イエスが父なる神のみもとに帰られてから十日目、父なる神と御子イエス・キリストのもとから、聖霊がやってきて、主イエスの弟子達の上に降った…と聖書は語ります。聖霊とは何でしょうか？パウロはこのように語っています。「あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、『アッバ、父よ』と呼ぶのです。」(ローマ書 8:15)つまり、聖霊とは、見えない御子・イエス様であります。そして、イエス様を自分の救い主だと告白する人の中に、この見えない主イエスが住んで下さる…それが聖霊なのであります。そのようにして、神は滅んでも仕方がない私たちを救おうとされているのです。

ですから、この詩編1篇で「いかに幸いなことか」と歌われている人は誰か？といえば、先ず第一に、人となりたる神の御子、キリスト・イエスなのです。そし

て、このキリスト・イエスが私たちの中に住んで下さるからこそ、私たちは、なんの功績もないのに、神様に「正しい人」として認められ、「なんと幸せなことか」という人生を歩む可能性が与えられるのです。神の子の霊をその内に迎え入れた者の幸いをこの詩編は歌っていると言えます。しかし、聖霊は私たちを力尽くで支配しようとは決してなさいません。私たち一人一人の自主性に委ねるのです。神の子の霊を無視して生きるか、それとも、聖霊の導きに従って生きるのか？ 私たちは、自由に選ぶことができるのです。どちらを選び取るかは、私たち次第。

6 「学ぶ」と「愛する」

では、聖霊の導きを選び取るにはどうしたらよいのでしょうか。2 節には、「**主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ**」とあります。主の教え…とは、神の教え、イエス・キリストの教え。神の言葉、主イエス・キリストの言葉、聖書の言葉であります。それを愛することが、「幸いなるかな」と呼ばれる人生の鍵となり、主イエスの学校で学ぶことの第一であります。

皆さんは、ご存知でしょうか。英語の「study(学ぶ)」の語源は、ラテン語で「情熱」を意味する studium(スツウディウム)らしいのです。このラテン語は、学ぶ対象に情熱を注ぐ、つまり、学ぶ対象を愛することに通じる言葉であります。「主の教えを愛する」とは、主イエスを愛し、この方について情熱を傾けて学ぶことです。

7 絶えず主の教えを想う

そして、「**その教えを昼も夜も口ずさむ**」とあります。「口ずさむ」は別の訳では、「想う」「考える」とも訳されています。英語版の聖書では meditate、「黙想する、瞑想する、熟慮する」という意味の単語が使われています。聖書の言葉を口ずさむこと、想うこと、心を十字架と復活の主イエス・キリストに向けて考える事、想う事が私たちを幸せにするということです。

私は先週の月曜日から木曜日まで、静岡県裾野市にある不二聖心マリア修道院の黙想の家に行き、「祈る」ことを学ぶセミナーに参加しました。カリキュラムの中には黙想の学びも含まれており、「沈黙の食事」というものを経験しました。参加者全員が、祈りを胸に神さまとの対話のうちに黙って目の前の食事と向き合い、そして食べます。「沈黙」というのは、声を出さないだけではありません。心から自分の言葉をなくし、ただ神のことを想うのです。そうして目の前の食事の一つ一つを口に運んでいますと、朗読者が、おもむろに聖書の御言葉を朗読します。聖書の言葉を聞きながら、食事を口に運んでいる時、私は、朗読される聖書の言葉を食べている…命の言

葉が体の中に入っていく私の体を養っていることを実感しました。「人はパンだけで生きるにあらず、神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる」という聖書の言葉を経験しました。

「**主の教えを愛し、昼も夜も口ずさむ**」このことにいつも徹底したのは、先ず、主イエスでありましょう。私たち人間は、通常、自分をはじめ人の言葉や考えを愛し、それを口ずさみ、人間の教えで心をいっぱいにしています。ですが、主イエスは違うのです。主がいつも絶えず心に向けておられたのは、父なる神の御心であり、言葉でありました。人の儂い、頼りにならない言葉や考えではなく、神の言葉、神の想いに心に向けながら、この地上で生活しておられたのです。この主イエスのように、私たちも私たちが心より愛する主イエスの言葉に自分たちの心を満たすこと、その事を、主イエスの学校で学ぶのです。

8 主の教え

ですが、私たちが愛し口ずさむように勧められているのは、「主の教え」です。それは、「あなたの敵を愛しなさい」「人を裁いてはならない」に代表される教えです。私たちの力だけでは到底守れない教えであります。それを自分の力でできる…とするのは、偽り者であります。しかし、私たちには出来ないとしても、私たちの内には、神の御子の霊が住んでくださっているのです。私たちにはできない、けれども、主イエスの霊であればできます。ですから、私たちは、主の教えに想いにひたすら心に向けながら、私の内に住んでくださる主イエスの霊に自分を明け渡すことに挑戦するのです。主の教えを口ずさむー主の教えで、想いで、私たちの心をいっぱいにして、聖霊に自分を明け渡すーそのことに挑戦します。

やはり敵であろうとも、愛せないこと、人を裁かざるを得ないことは辛いこと、窮屈なことなのです。不自由なことです。神の愛を知っている者にとっては束縛なのです。ですが、弱い私たちの力だけでは、憎まざるを得ない、無関心にならざるを得ない、裁かざるを得ません。だからこそ、私たちはそのような自分の想いを追い出し、主の教えを口ずさむことで、私たちの心を主の想いで満たしてもらおうのです。そうして、私たちは自分を聖霊に明け渡すのであります。一度うまくできても次は失敗するかもしれません。だからいつも挑戦であり、学びです。そうして、思い切って主イエスの霊に自分を明け渡す時、私たちは変わります。使徒パウロはこう言っています。「**もはや我、いくるにあらず。キリスト我が内にありていくるなり**」(ガラテヤ書 2:19)。このように、私たちが、自分の内に生きて下さる聖霊に、自分自身を委ねれば、私たちはつくりかえられます。自己中心という檻から開放され、人を愛せなかった者が、神と自分と隣人を愛する者へと変えられるのです。霊なる神が新しい創造の業として、私たちを神の子としてイエス・キリストの弟、妹につくり

かえてくださるのです。それこそが「なんと幸いなるかな！」と言われる人生なのです。

私たち一人一人がその幸いに生きる時、世界は確実に変わります。弱肉強食の獣のような社会に、神の愛が実現していくのです。政治が変わり、社会の仕組みが変わります。時間がかかっても。それ以外に、この世界を神の愛のうちに作り上げる方法はないと私は思います。武力や何らかの力によって社会を変えたとしても、今までと同じことの繰り返しです。一人一人が神の愛に気づき、主イエスに学んで生きること。それがどんなにもどかしく思えても、世界を滅びから救う唯一の道なのではないでしょうか。

9 キリストに倣いて

先ほど、英語の「学ぶ」study は、情熱を注ぐというラテン語からできていて、愛するにも通じるものだ…と申しました。では、日本語の「学ぶ」の語源はなんなのでしょう。日本語の「学ぶ」の語源は、「まねる」だそうです。学びたい人、師匠の言葉と行いを見よう見まねで真似をすることが、学ぶことに通じるというのです。聖書では、これを「主に倣う」とか「キリストに倣う」という言葉で表しています。使徒パウロはテサロニケ信徒の手紙1で次のように言っています。「そして、あなたがたはひどい苦しみの中で、聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ、わたしたちに倣う者、そして主に倣う者となりました」(テサロニケ I 1:6)。このように使徒パウロは、主イエスに倣って生きている自分たちの後続くように、各地の信仰者に繰り返し呼びかけています。それは、主イエスを繰り返し繰り返し真似し続けなさい…という勧めなのです。

10 流れのほとりに植えられた木

主の教えを愛し、主の教えを学ぶ人を詩人は次のように美しく歌っています。「その人は流れのほとりに植えられた木。ときが巡り来れば実を結び、葉もしおれることがない。その人のすることはすべて、繁栄をもたらす。」イスラエル、特にエルサレムのあるイスラエル南部には、山にも大地にも緑はまばらで、茶色い大地が広がっています。降水量が少ないからです。人工的な泉や川も昔から造られたようです。3節の「流れ」も、人工的な灌漑施設の川だと考えられており、そのほとりの木もまた植樹されたもののようです。父なる神は、荒野で芽を出しても水がなくて枯れるしかなかった私たちを、豊かな流れのほとりに植えかえ、季節になれば、必ず葉を青々と茂らせ、実を結ぶようにしてくださるのです。

ですが、実を結ぶには忍耐が必要です。その「時」を待たねばなりません。

これを桜に例えた人がいます。私たち日本人は桜の花が大好きです。三月後半になると連日、天気予報は桜の開花予報で賑わいます。ですが、見方を変えれば、開花予報というものは、その時までは、桜の花は咲かない…ということ。しかし、咲き始めれば一気に咲きます。葉っぱも皆落ちて死んでしまったような木が、春になると息を吹き返し、実を結び、葉が鬱蒼とし始めるのです。まるで生き返ったかのようです。ですが、そうなるためには「時」が来なければなりません。忍耐して待つ必要があるのです。死んだような季節があるからこそ、芽吹き季節があります。人の一生だって、様々な時があります。愛する伴侶が亡くなってしまって茫然としてしまうこともあるし、突然、自分自身が病に罹ったり、災害や事故に遭ってしまったりすることもあります。突然失業することもあるでしょう。いつも「幸い」であるわけではありません。必ず冬の季節があります。

しかし、そうであっても「時がめぐりくれば必ず花が咲き、実をつける」と確信し、主の教えを口ずさみながら、希望をもって生きる事ができるのは、やはり、「なんと幸いなことか」という人生ではないでしょうか。2節の「**主の教えを愛する**」という「愛する」という言葉は、「喜ぶ」とも訳せる言葉です。主の教えがもたらす豊かな実りを経験して、私たちはこれを喜ぶ事ができる者に変えられるのです。

ですが、それだけではありません。この私たちがつける花や実を喜んでくれているのは、先ず何よりも神ご自身です。満開の桜を見上げて私たちの心は、その美しさに心が震え喜びます。父なる神は、聖霊の力によって、主の教えを愛し、これに従って生きた結果、時を迎えて花を咲かせ実を結ぶ私たち一人一人に心震わせこのうえなく喜んでくださいます。神にこのうえなく喜んでいただける人生こそ、「なんと幸いなことか」と詩人が叫び声をあげるような人生ではないでしょうか。「**神に従う人の道を主は知ってくださる。**」とある通りです。

11 神に知られる

そして、詩編1は、「**神に逆らう者の道は滅びに至る。**」で終わっています。しかし、いつの時代も、わたしも人間の目には、神に逆らうの方が、栄えているように見えます。実は聖書はそのような現実をよく知っていました。詩編には、神に逆らう者が栄える現実を嘆く詩がたくさんあります。何故、神に逆らう者が富み栄え、神に従う者が困窮の際に立たざるを得ないのか？私たちの生きる現代社会でもそのようなことが多くあります。

しかし、神に背き、この世の繁栄を謳歌する人々もまた、いつかは死ぬのです。永遠に生きる事はできません。永遠という視点に立つならば、彼らの繁栄は一瞬の事です。神が目を留められるような事を成し得なければ、それは風に吹き飛ばされる粃殻、虚しい事です。天国には持っていけない彼らの栄華であります。

ですが、主イエスの愛に応えて主イエスを愛し、彼に従いゆく者の命を神は知っていてくださる、喜んでくださる。聖霊によって導かれ、私たちの歩む一步一步は、父なる神の愛の眼差しの中にある確かな一歩であります。神がこの一歩をお忘れになることはないのです。小さい子がよちよち歩く時、その一步一步を両親は、愛にあふれた眼差しで眺めるでしょう。それと同じように神は、私たちのあゆみを眺めていてくださるのではないのでしょうか。しかし、私たちが神に逆らう方を選べば、神の愛ある眼差しから外れてしまい、時の彼方に消え去るしかないのです。

12 主イエスの学校

私たちは、この地上で生きている間、この主イエスの学校で学び続けます。神の子として成長し続けます。それに終わりはありません。皆さん、一人一人の中に住んでおられる御子の霊は、皆さんをいつも新しい者、未だかつて皆さんが成ったことがない者にしようとしておられるからです。そうして、皆さんは、父なる神の長男であり、私たちの師であるイエス様に、じょじょに近づいていくのです。同じになる事など決してできませんが、近づくことはできるのです。学ぶことは、愛することであり、真似をすることですから。こうして私たちは、主イエスの学校で学びながら、「幸いなるかな」という命を生きることが許されています。

そして、学ぶべきことを学んだ時、父なる神のみ元へと召されます。主イエスの学校を卒業するのはその時です。ですから、信仰者の死は、禍々しいものではなく、天国への入学式に備えての、地上の学校の卒業式なのです。その卒業式には、喜びに溢れる父なる神と主イエスがおられます。主イエスを愛し、主イエスの後に従いつつ、主イエスの学校を、横浜ナザレン教会の皆さんと、そして、これから横浜ナザレン教会に加わる方たちと共に生きていきたいと切に願います。